

最近の肝臓病に関する医療情報（2025.12.18）

最近の各種メディアの記事から肝臓病に関する話題を紹介します。

1. 大阪大学特任教授の坂口志文先生が、「末梢性免疫寛容に関する発見」により、ノーベル賞を受賞しました。

坂口先生は免疫応答を抑制する「制御性 T 細胞（regulatory T cell, Treg）」の発見とその役割の解明を通じて、自己免疫疾患やがん、移植免疫などの研究の発展に多大な貢献をされました。

日本人のノーベル生理学・医学賞受賞は、2018 年の本庶佑・京都大学特別教授以来 7 年ぶり、同賞としては 6 人目となります。

この受賞に対して産経新聞が、東京肝臓友の会の米澤事務局長や古川祥子さん（自己免疫性肝炎）に取材し、「「希望の光」 坂口氏ノーベル受賞に自己免疫疾患患者らが喜び 治療薬待ち望み」と題した記事を掲載しています。

以下参照ください。

<https://www.sankei.com/article/20251007-B3XIY7R4AJKQLDCNMBUEVELKGQ/>



2. 近畿大学の工藤先生を議長とする「Lancet Commission on Liver Cancer（肝細胞癌に関するランセット委員会）」は、世界的な肝細胞癌治療の包括的戦略提言をまとめました。

肝細胞癌は日本では減少傾向にありますが、国際的には増加傾向にあり、2050 年には世界の新規肝細胞癌の発生が 152 万人、肝癌関連死が 137 万人と現在の約 2 倍になると見込まれています。この提言を実施することによって、肝細胞癌の発生を 60%以上減少させることができる可能性があるとしています。

提言には、（1）一次予防、（2）早期発見、（3）治療、（4）医療アクセス格差の是正の 4 つの観点から 10 項目の課題が挙げられています。以下に、その項目を列举しておきます。

（1）HBV ワクチンの普及（2）アルコール消費の低減（3）汚染水や食品中の有害物質の対策（4）代謝機能障害関連脂肪性肝疾患（MASLD）・代謝機能障害関連脂肪肝炎（MASH）に対する認知向上と生活習慣改善（5）肝臓の健康に関する認知の向上（6）肝硬変患者における肝細胞癌患者のサーベイランス（7）肝細胞癌の画像診断における判定基準の標準化（8）肝細胞癌治療に関する東西の違いの是正、（9）肝細胞癌患者の生存者の支援、（10）HCV や肝細胞癌治療へのアクセスの改善。

これらの課題に対して目標と戦略が記載されています。（出典：がんナビ）

<https://medical.nikkeibp.co.jp/leaf/all/cancernavi/news/202507/589705.html>



3. TACE とレンバチニブ、ペムブロリズマブ併用療法、切除不能な非転移性肝細胞癌の OS に有意な延長認めず

エーザイと米 Merck 社は 10 月 29 日、切除不能な非転移性肝細胞癌に対する肝動脈化学塞栓術（TACE）とレンバチニブ（レンビマ）、ペムブロリズマブ（キイトルーダ：免疫チェックポイント阻害剤）の併用療法は、TACE のみよりも全生存期間（OS）の有意な延長を認めないことが分かったと発表しました。フェーズ 3 試験の中間解析の結果、判明しました。

この結果、試験は中止されると発表されています。

（出典：エーザイ）

<https://www.eisai.co.jp/news/2025/news202576.html>



4. ノボ株価が急上昇、肥満症治療薬が肝疾患治療で米 FDA から迅速承認

肥満症治療薬「ウゴビー」が、重度の肝疾患（MA SH）に対する治療薬として米食品医薬品局（FDA）から迅速承認され、ライバルのイーライリリーに先んじて米市場参入を果たしたためデンマーク製薬大手ノボノルディスクの株価が急上昇しているようです。

イーライリリーも肥満症治療薬の「ゼップバウンド」や「レタトルチド」を対象に、大規模な肝疾患治験を年内に開始する事を考えているようです。

（出典：ブルームバーグ）

<https://www.bloomberg.com/jp/news/articles/2025-08-18/T16LCCGP9VCW00>。



5. 悪性リンパ腫治療で拡散アナログの投与を失念の医療事故が発生

神戸市は、市立西神戸医療センターで悪性リンパ腫と診断された 70 代の男性患者について、B 型肝炎ウイルスを保有していることを担当医が失念して薬の処方を中止し、男性が急性肝炎を発症して死亡する医療事故があったと発表した。

この医療事故に対しては、日肝協でも問題になり厚労省に再発防止を申し入れました。（出典：神戸新聞）